

第4章 弥生時代

① 大陸からの移住

(1) 弥生時代の始まり

紀元前4、5世紀ごろ、戦乱の影響などで朝鮮半島から日本列島に多くの人々が移住してきた。彼らは日本列島に(稲作)と(金属器)を持ち込み、それまでの狩猟・漁労生活中心の縄文時代の人々とは違った生活や文化を持っていた。彼らは在来の縄文人とともに水稻農耕を中心とする新しい文化を形成していく。九州北部に始まった水稻耕作は、100年ほどかけて近畿地方にまで伝播し、2世紀頃には東北地方北部まで普及した。

【国立歴史民俗博物館の発表】

従来、弥生時代の始まりは紀元前4、5世紀頃と言われてきたが、2003年に、国立歴史民族博物館が、九州北部の遺跡から出土した土器などを放射性炭素測定法で年代測定したところ、弥生時代の開始年代は紀元前10世紀頃までさかのぼる可能性があると発表した。

(2) 稲作のようす

水田は、始めは低湿地を利用した湿田であったが、灌漑技術が進歩するにつれて高地にも水田をつくるようになった。耕作には木製の鋤や鋤が使われた。かつては、弥生時代の稲作では田植えは行われておらず、直播のみが行われていたと考えられたが、最近の調査では、田植えらしき痕跡が（岡山県の百間川原尾島遺跡、神戸市の本庄町遺跡などで）見つかっている。秋になって稲が実ると、穂首を(石包丁)で摘み取り、稲穂の状態のまま壺などに入れて(高床倉庫)に納めて貯蔵した。食する際に木製の(臼)と杵で脱穀した。脱穀した米は甕の形の土器で炊いた。

(3) 弥生土器

縄文土器の特徴が、縄目の文様があり、厚手できめがあらく、もろい作りであったのに対し、弥生土器は、(薄手)で(硬く)、(赤褐)色で、無文か幾何学的な簡素な文様をもつ土器と説明される。しかしながら、弥生土器が縄文土器と大きく異なる重要なところは、外観のデザインだけではなく、弥生土器が農耕生活の影響を受けて、高さが30cmを超える大きな貯蔵用の壺形土器、煮沸用の甕形土器、盛付用の高坏形土器や鉢形土器など種類が豊富であることである。

(4) 金属器の伝播

稲作と共に、金属器が日本列島に伝わった。世界の多くの地域では、石器→青銅器→鉄器と順を追って使用されるようになるが、日本列島では弥生時代の早期から青銅器と鉄器がほぼ同時に使用されるのが特徴的である。(青銅器)は主に祭祀用に、(鉄器)は武器や利器などの実用的なものに使用された。

【青銅器の種類】

青銅器	特徴・用途・分布など
銅 剣	細形銅剣は大陸から持ち込まれたもので実用的な銅剣で、九州北部で多く分布。平形銅剣は日本国内で製造されたもので非実用的で祭器として用いられ、瀬戸内周辺で分布。
銅 矛	銅矛は根元が袋状になっていて、長い木の柄に刺して使う槍のような武器。当初は朝鮮半島から持ち込まれた実用的武器であったが、日本国内で製造されるようになると祭器として用いられるようになる。九州北部から四国にかけて分布。
銅 戈	刃に直角に柄をつけて鎌のような形状にした武器。当初は朝鮮半島から持ち込まれた実用的武器であったが、日本国内で製造されるようになると祭器として用いられるようになる。九州北部から四国にかけて分布。
銅 鐸	朝鮮半島から伝わった青銅製の小さな鐘をまねて日本で大きなものが作られたと考えられている。当時の生活を写す原始絵画を鋳出されたものもあり、農耕祭祀に用いられたと考えられている。近畿地方を中心に中国、四国、中部地方に渡り分布。
銅 鏡	中国・朝鮮から持ち込まれたものが多い。魔よけや権威のシンボルとして副葬された。

(5) 社会の発展

水稲耕作は人々の生活を大きく変えた。人々は移動の必要がなくなり、定住するようになった。さらに、米作りは共同作業が必要であるため、一か所に集まって生活をするようになった。しかしその一方で、伝統的な狩猟や漁労などの食料採取も行なわれていたと考えられている。また、豚の飼育が行なわれていたことも知られている。人々の住居は縄文時代と同じく竪穴住居が一般的であったが、収穫した米を貯蔵する高床倉庫の普及とともに、高床の住居も増えるようになった。人が死ぬと、死者は木や石や土器の棺に納め、集落の近くの共同墓地に埋葬された。棺によっては、銅剣・銅矛・銅鏡などの副葬品が納められているものが見つかっている。これは、人々の間に(身分の違い)や(貧富の差)があったことを物語っている。

【弥生時代の主な遺跡】

遺跡名・化石名	遺跡発見地	発見年	遺跡の内容
登呂遺跡	静岡県静岡市	1943年	平地式の住居跡、高床倉庫、水田跡など
吉野ヶ里遺跡	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	1986年	大環濠集落跡
板付遺跡	福岡県博多区板付	1950年	縄文晩期～弥生時代の水田跡など

② クニの誕生

(1) 小国の分立

弥生時代の特徴的な事象の一つに、集落の周囲に環状の濠をめぐらした集落(環濠集落)をあげることができる。環濠集落の特徴は、防衛設備をめぐらしているところにある。また、弥生時代の遺跡からは石剣や銅剣などが刺さっている人骨が多数見つかっている。このようなことから、集団対集団による、戦争のような対立は日本では弥生時代に始まったと考えられている。環濠によって守られた集落は戦争を繰り返し、やがて政治的なまとまりを形成するようになり、各地に小国が誕生したと考えられている。日本に小国が分立していたことは、「漢書」地理志や「後漢書」東夷伝などの中国の歴史書から知ることができる。

「漢書」地理志

そ 夫れ楽浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ。

【現代語訳】

(前漢の武帝が朝鮮半島に設置した)楽浪郡より遠く海上に倭人がおり、百余りの国がある。そして、(漢に)定期的に天子にお目にかかりたいと言って朝貢してくる、と(楽浪郡からの報告者は)言っている。

「後漢書」東夷伝

建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ。桓靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して暦年主なし。

【現代語訳】

建武中元二(西暦57)年、倭の奴国が貢物をもって天子にあいさつをしにやって来た。使者は自分の官名を大夫であると紹介した。(奴国は)倭の最南端に位置する。光武帝は(奴の国王に)印と印を身につける組紐とを与えた。安帝の永初元(西暦107)年、倭国の王帥升らが、奴隷を160人献上し、天子にお目通りしたいと願った。桓帝(在位146～167年)と靈帝(在位167年～189年)の時期、倭国は大いに乱れ、互いに攻め合い、長年王が不在であった。

(2) 漢倭奴国王

「後漢書」東夷伝によると、建武中元二年(西暦57年)、北九州にあった奴という国の王が後漢に使いを送り、後漢の光武帝から(漢委奴国王)と彫られた金の印綬を受けたことや、安帝の永年元年(西暦107年)には倭の国王帥升等が生口(奴隷)160人を安帝に献上したことが書かれている。倭の国の王たちは、自分の地位を中国の皇帝に認めてもらい、自分の権威を高めるために度々使者を送ったと考えられている。

(3) 邪馬台国連合

中国大陸では、西暦 220 年に後漢が滅び、北方の魏、南方の呉、西方の蜀が並び立つ三国時代を迎える。その三国時代の歴史書『三国志』の中の、「魏志」倭人伝(正確には、『三国志』魏書烏丸鮮卑東夷伝倭人条^{う がんせん び どういでんわじんのじょう})には、2世紀後半～3世紀中頃の倭の情勢について書かれている。

(4) 「魏志」倭人伝の概要

- ① 邪馬台国の王は元来男であったが、戦乱が長く続いたので、小さな国々が共同して女性の卑弥呼を王としたところ戦乱が治まり、30 ほどの小国の連合国が生まれた。
- ② 卑弥呼は呪いによって人を惹きつける力を持っていた。夫はいなく、弟が政治を助けた。
- ③ 卑弥呼は紀元 239 年、魏の皇帝に使者を送り、「親魏倭王」の称号と印綬、多数の銅鏡などを贈られた。
- ④ 卑弥呼が亡くなると、大きな墓が作られ、100 人あまりの奴婢(奴隷)と一緒に埋められた。その後、男の王が立ったが、再び国中が乱れたので、卑弥呼の一族の少女、壹与を王とした。

<<< 関連語句 >>>

- 弥生土器…1884(明治17)年に東京府本郷区向ヶ岡弥生町(現、東京都文京区弥生二丁目)の向ヶ岡貝塚で発見された。出土地の地名にちなんで弥生土器と名付けられた。
- 「漢倭奴国王」の金印…江戸時代、1784(天明4)年2月23日、博多湾にある志賀島の百姓、甚兵衛が田に水を引き入れるための溝を整備するために大きな石を金でこで動かしたところ、光るものがある。驚いた甚兵衛は兄と相談し、庄屋の長谷川武蔵を通じて藩の郡奉行所へ口上書を添えて提出し、金印は黒田藩の所有物となった。江戸時代からこの金印は偽物ではないかという意見があった。つまみが蛇をかたどった印が、漢の制度にないことなどがその理由であったが、1957(昭和32)年、中国雲南省の石寨山古墳から「滇王之印」と彫った蛇形につまみのある金印が出土するに及び、また、正確に金印を計測し、一辺の平均の長さ2.345 cmが後漢初期の一寸にあたることをつきとめられ、偽物説は退けられた。
- 邪馬台国論争…邪馬台国がどこに存在していたかという論争。その所在には諸説があるが、有力な説は「九州説」と「畿内説」である。「九州説」に立てば、三十国による邪馬台国連合というのは九州内だけの連合ということになる。一方「畿内説」に立てば、近畿地方から瀬戸内、北部九州までの西日本のほぼ全域に渡る広域の政治連合がすでに3世紀前半には成立していたことになり、のちのヤマト王権と直接つながることになる。
- 纏向遺跡…2009(平成21年)、奈良県桜井市の纏向遺跡から三世紀前半の大型建物跡が発掘され、邪馬台国の時代と同じ時代の大型建物跡ということで、卑弥呼と関連の建物跡ではないかと注目されている。
- 三角縁神獣鏡…縁の断面が三角形を呈し、中国の神話に登場する神仙や霊獣を浮き彫りにした文様をもつ鏡。景初三(239)年や正始元(240)年の魏の年号銘を持つことから魏の鏡と考えられ、卑弥呼が魏の皇帝から下賜された鏡と考えられてきたが、中国から同じ鏡が出土されていないことから、これを疑う研究者も多い。
- 「魏志」倭人伝…三世紀に晋の陳寿が撰した歴史書「三国志」のうちの「魏書」の「東夷伝」の倭人の条。正しくは「魏志」烏丸鮮卑東夷伝倭人条であるが、我々はそれを略して単に、「魏志」倭人伝と呼んでいる。詳しくは次ページの全文書き下し文と現代語訳を参考に。

「魏志」倭人伝

倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧くは百余国、漢の時、朝見する者あり。今、使訳通ずる所は三十国なり。郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓国を歴て、乍く南し、乍く東し、その北岸の狗邪韓国に到るに、七千余里。始めて一海を度ること千余里にして、対馬国に至る。その大官は卑狗と曰い、副を卑狗母離と曰う。居す所絶島にして、方四百余里可りなり。土地は山陰しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸有り。良田なく、海の物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す。又、南して一海を渡ること千余里。名づけて瀚海と曰う。一大国に至る。官は亦卑狗と曰い、副は卑奴母離と曰う。方三百里可り。竹木の叢林多く、三千許りの家有り。差か田地有りて田を耕せるも、猶食するに足らざれば、亦、南北に市糴す。又、一海を渡ること千余里にして、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜いて居す。草木茂り盛んならば、行くに前人を見ず。好く魚鱧を捕らえ、水は深淺と無く、皆沈没して之を取る。東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る。官は爾支と曰い、副は泄謨觚・柄渠觚と曰う。千余戸有り。世に王有るも、皆、女王国に統属す。郡使往来するも、常に駐まる所なり。

東南、奴国に至るに百里。官は兕馬觚と曰い、副は卑奴母離と曰う。二万余戸有り。東行して不弥国に至るに百里。官は多模と曰い、副は卑奴母離と曰う。千余家有り。

南して、投馬国に至るには、水行して二十日なり。官は弥弥と曰い、副は弥弥那利と曰う。五万余戸可りなり。南して、邪馬壹国(原文では壹国となっているが、臺国の誤記と考えられている)に至る。女王の都する所なり。水行して十日、陸行して一月なり。官には伊支馬あり、次は弥馬升と曰い、次を弥馬獲支と曰い、次は奴佳鞮と曰う。七万余戸可りなり。女王国自り以北は、其の戸数・道里は略載するを得べきも、其の余の旁国は遠絶にして詳かにするを得べからず。

次に斯馬国有り、次に巳百支国有り、次に伊邪国有り、次に都支国有り、次に弥奴国有り、次に好古都国有り、次に不呼国有り、次に姐奴国有り、次に對蘇国有り、次に蘇奴国有り、次に呼邑国有り、次に華奴蘇奴国有り、次に鬼国有り、次に為吾国有り、次に鬼奴国有り、次に邪馬国有り、次に躬臣国有り、次に巴利国有り、次に支惟国有り、次に烏奴国有り、次に奴国有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国有り。男子を王と為す。其の官には、狗古智卑狗有り。女王に属かず。郡自り女王国に至るには、万二千余里なり。

*

*

*

男子は大小と無く、皆、面を黥み身を文る。古自り以来、其の使は中国に詣りて、皆、自ら大夫と称す。夏後の少康の子、会稽に封ぜられしとき、髪を断り身を文り、以て蛟龍の害を避く。今、倭の水人は、好く沈没して魚鱧を捕らえ、身を文り、亦、以て大魚・水禽を厭える。後、稍く以て飾りと為れり。諸国の文身は各異にし、或いは左に或いは右に、或いは大に或いは小にす。尊卑、差有り。其

の道理を計るに、当に会稽・東冶の東に在るべし。

其の風俗は淫れず。男子は皆露わにして紵、木絛を以て頭に招ぐ。其の衣は横幅にして、但結束して相連ね、略、縫うこと無し。婦人は髪を被すか、屈め紵。衣を作ることは單被の如くして、其の中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。禾稻・紵麻を種え、蚕桑・緝績し、細紵・縑絛を出だす。其の地に牛・馬・虎・豹・羊・鵲無し。兵には矛・楯・木弓を用う。木弓は下を短くし上を長くす。竹箭なるも、或いは鉄鏃、或いは骨鏃なり。有無する所は、儋耳・朱崖と同じ。倭の地は温暖にして、冬も夏も菜を生ずるを食す。皆、徒跣なり。屋室有りて、父母・兄弟は、臥息するに所を異にす。朱丹を以て其の身体に塗ることは、中国の粉を用うるが如きなり。食飲には籩豆を用い、手ずから食す。其の死には、棺有るも槨なし。土を封じて冢を作る。死に始づき、喪を停むること十余日。時に当りて肉を食らわず。喪主哭泣し、他の人は就りて歌舞飲酒す。已に葬れば、家を挙りて水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如くす。其の行来・渡海して、中国に詣るには、恒に一人を以て頭を梳らず、蟣蝨を去らず、衣服は垢に汚れ、肉を食わず、婦人を近づけず、喪の人の如くせしむ。之を名づけて持衰と為す。若し行く者が吉善なれば、共に其の生口・財物を顧み、若し疾病有りて、暴害に遭えば、便ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹まざればと謂う。真珠・青玉を出だす。其の山には丹有り。其の木には櫟・杼・豫・樟・榉・櫨・投(原文には投とあるが、椈の誤記か)・櫨・烏号・楓香、其の竹には篠・箠・桃支有り。薑・橘・椒・囊荷有るも、以て滋味為るを知らず。獼(原文は獼とあるが獼の誤記か)猴・黒雉有り。其の俗、事を挙げ行き来するとき、云為する所有らば、輒ち骨を灼きて卜し、以て吉凶を占う。先ず卜する所を告ぐ。其の辞は令亀法の如く、火坵を視て兆しを占う。其の会同し坐起するときは、父子・男女に別なし。人の性、酒を嗜む。大人の敬する所に見えれば、但手を搏ち、以て跪拜に當つ。其の人は寿考にして、或いは百年、或いは八、九十年なり。其の俗は、国の大人ならば皆四、五婦、下戸も或いは二、三婦なり。婦人は淫れず、妬忌せず。盜竊せず、諍訟少なし。其の法を犯さば、輕き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸及び宗族を没す。尊卑各差序有りて、相臣服するに足る。租賦を収むる邸閣有り。国々に市有りて、有無を交易す。大倭を以て之を監せしむ。

*

*

*

女王国自り以北には、特に一大率を置き、(「諸国」の二字が脱字か) 檢察せしむ。諸国、之を畏れ憚る。常に伊都国に治し、国中に於いて刺史の如き有り。王、使を遣わして京都・帶方郡・諸の韓国に詣る、及び郡の倭国に使いするとき、皆、津に臨み伝送の文書・賜遣(原文は遣、遣の誤記か)の物を搜露し、女王に詣るには差錯するを得ず。下戸が大人と道路に相逢わば、逡巡して草に入る。辞を伝へ事を説くときは、或いは蹲り或いは跪き、両手は地に抛りて、之が恭敬を為す。対応する声は噫と曰う。比するに然諾の如し。其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年にして倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為せり。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道を事

とし、能く衆を惑わす。年已に長大なりしも、夫婿無し。男弟有りて、国を治むるを佐く。王と為れる自り
以来、見えること有る者少なし。婢千人を以て、自ら侍らしむ。唯男子一人有りて、飲食に給し、辞を
伝え、居処に出入す。宮室・楼観・城柵厳かに設え、常に人有りて、兵を持して守衛す。

女王国の東、海を渡ること千余里にして、腹、国有り。皆、倭の種なり。又、侏儒国有りて、その南の
人は長三、四尺のもの有り。女王(「国」の一字が脱字か)を去ること四千余里なり。又、裸国・黒齒国有
りて、復、其の東南に船行一年にして至るべし。倭の地を参問するに、海中の洲嶋の上に絶在し、或い
は絶え或いは連なり、周旋は五千余里可なり。

*

*

*

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。
太守劉夏、吏を遣わし、将い送りて京都に詣らしむ。其の年十二月、詔書して倭の女王に報えて曰う、
「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、
汝献ずる所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じて以て到れり。汝が在る所は踰かに
遠かりしも、乃ち使を遣わして貢獻す。是れ汝の忠孝なり。我甚だ汝を哀れむ。今、汝を以て親魏
倭王と為し、金印紫綬を假え、装封して帯方の太守に付して假授す。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝
順を為せ。汝の来使難升米・牛利は、遠きを涉り、道路に勤劳せり。今、難升米を以て率善中郎将と為
し、牛利を率善校尉と為し、銀印青綬を假え、引見して勞い賜いて、遣わし還さん。今、絳地交龍錦五
匹・絳地縹栗罽十張・清絳五十四・紺青五十四を以て、汝が献ずる所の貢直に答う。又、特に汝に紺
地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十四・金八兩・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠(原文は真珠とある
が真朱の誤記か)・鉛丹各五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。還り到らば録受し、悉く
以て汝が国中の人に示し、国家の汝を哀れむが故に鄭重に汝の好める物を賜うことを知ら使む可きな
り」と。

正始元年、太守弓遵、健中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣る。倭王に拝假し
て、并せて詔を齎し、金・帛・錦・罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因りて上表し、詔恩に答謝
す。其の四年、倭王、復、使の大夫伊声耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛
布・丹の木の拊(原文は彳に付、拊の誤記か)の短き弓と矢とを上献す。掖邪狗等、率善中郎将の
印綬を壺に捧す。其の六年、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して假授せしむ。其の八年、
太守王頎、官に到る。倭の女王・卑弥呼は、狗奴国の男王・卑弥弓呼と素より不和なり。倭、載斯・烏越
等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黄幢を齎し、難
升米に拝假せしめ、檄を為りてこれを告諭す。

卑弥呼以て死し、大いなる冢を作ること径百余步なり。徇葬する者は、奴婢百余人とす。更めて男
王を立つるも、國中服さず、更に相誅殺し、当時千余人を殺す。復、卑弥呼の宗女の壹与年十三なる

を立てて王と為し、國中遂に定まれり。政等、檄を以て壹与に告諭す。壹与、倭の大夫率善中郎將掖邪狗等二十人を遣わし、政等を送りて還らしむ。因りて台に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大句珠二枚・異文雜錦二十匹を貢ず。

【現代語訳】

倭人は、(魏の) 帯方郡の東南に広がる大きな海の中に住んでいる。山からなる島を抛り所にして国や村を作っている。「漢書」によれば古くは百以上の国があり、漢の時代には、(漢の天子に) 朝貢する者がいた。今、(魏に) 通訳を連れて使者が通交しているのは三十か国である。帯方郡から倭の地に行くには、(朝鮮半島の西) 岸に沿って海上を行き、韓の国々を経由するために南に進んだり東に進んだりして、倭の北岸に(面する) 狗邪韓国(朝鮮半島南岸)に到着するまでに(帯方郡から) 七千里(およそ 3062 km) 余りある。そこではじめて千里(およそ 437 km) 余りの海を渡ると、対馬国に到着する。対馬国の長官は卑狗といい、副官は卑奴母離という。住んでいるところは絶海の孤島で、四百里四方ほどの大きさである。島は山が険しく、深い林が多く、道路も鳥や獣が往来するけもの道のように狭いものである。そこに千戸余りが住んでいる。良田はなく、海の物を捕って食べているが、船に乗って航行して米などを手に入れに行く。そこからまた南へ進み、千里(およそ 437 km) 余りの海を渡る。それは瀚海(対馬海峡のこと)と名付けられている。一大国(宍岐国のこと)に到着する。その長官は、(対馬国と同じように) 卑狗といい、副官は卑奴母離という。三百里四方ほどの大きさである。竹や木の林が多く、三千戸ほどの家がある。多少田地があつて耕作をしているが、それではとても足りない。船に乗って航行して米などを手に入れに行く。(宍岐国から) また一つ千里(およそ 437 km) 余りの海(宍岐水道)を渡ると、末盧国に到着する。そこは四千戸余りある。山裾や海岸線ぎりぎりまで家が並ぶ。草木が茂って盛んな時期には、前に行く人が見えないほどである。海の深浅に関係なく潜って魚や鮑を捕っている。(末盧国から) 東南に五百里(およそ 220 km) ほど陸地を進むと、伊都国に到着する。その長官は爾支といい、副官は泄謨觚・柄渠觚という。千戸余りある。伊都国にも代々の王がいるが、女王国に統括され帰属している。(帯方郡からの) 群使が行き来するときにいつも駐留するところである。

東南に進み、奴国に到着するまでに百里(およそ 44 km) がある。その国の長官は兕馬觚といい、副官は卑奴母離という。二万戸余りある。東に進み、不弥国に到着するまでに百里(およそ 44 km) がある。その長官は多模といい、副官は卑奴母離という。千戸余りある。南に進み、投馬国に到着するまでには、海上を二十日航行する。長官は弥弥といい、副官は弥弥那利という。五万戸ほどある。南に進むと、邪馬台国に到着する。女王が都を置いている処である。水上を進み十日、(さらに) 陸上を一か月進む必要がある。(別読み: 水上を進むなら十日、陸上を進むなら一か月必要である。長官は伊支馬、その下に、弥馬升、弥馬獲支、奴佳鞮がいる。七万戸余りある。女王国より北方の国は、その戸数や道程や里数についてはおおよその数は記載できるが、それ以外の周囲の国々については、遠くにあるため詳しく記載できない。

次に斯馬国があり、次に巴百支国があり、次に伊邪国があり、次に都支国があり、次に弥奴国があり、次に好古都国があり、次に不呼国があり、次に姐奴国があり、次に對蘇国があり、次に蘇奴国があり、次に呼邑国があり、次に華奴蘇奴国があり、次に鬼国があり、次に為吾国があり、次に鬼奴国があり、次に邪馬国があり、次に躬臣国があり、次に巴利国があり、次に支惟国があり、次に烏奴国があり、次に奴国がある。これが女王に属している国の境界の果てである。そのあらに南に、狗奴国がある。この国では男子が王となっている。長官は狗智智卑狗である。女王には服属していない。(帯方) 郡より女王国に到着するまでには、全部で一萬二千里(およそ 5250 km) 余りになる。

*

*

*

(倭の地の) 男子は成人・子どもに関係なく、皆、顔や身体に入れ墨をしている。古来より、倭国の使者はやって来ると、皆、大臣であると自称する。それは夏王朝の六代目の王、少康が復興した際に、少康の子が会稽に(王として) 封ぜられた時、自ら髪を切り、身体に入れ墨をいれ、蛟龍の害を避けた。(それに倣って) 倭の海人たちは、海に潜って魚や蛤を捕らえるのに、身体に入れ墨をいれ、それによって(鮫のような) 大きな魚や(海鷺のような) 水鳥からの襲撃を祓っている。(元来、そういう意味で入れ墨を入れたが) 今では飾りとなっている。諸国の入れ墨はそれぞれ異なっており、左にあつたり、右にあつたり、大きくあつたり、小さくあつたり施している。尊い卑しいで差がつけられている。その道程や里数を計算すると、ちょうど会稽の東冶の東に位置している(はずである)。

倭人の風俗は、(節操があつて) 乱れていない。男子は皆(冠を被らず髪を) 露わにしたまま結っており、木綿(麻の繊維)によって頭上に巻き上げている。衣服は一続きの横に広い布を使い、ただ束ねて結んでいるが、ほとんど縫っていない。成人の女性は髪を振り乱しているか、曲げて結い上げている。単衣の寝間着のような衣服を作り、その中央部に穴を開けて着ている。稲や麻を植え、蚕に桑を食わせ、糸を紡いで上等な麻織物や絹織物を産出している。倭の地には、牛・馬・虎・豹・羊・鶴がない。兵は矛・盾・木弓などを用いている。木弓は下が短く上が長い大弓である。矢柄は竹であるが、鉄鏃を付けたり、骨の鏃を付けたりしたものもある。他に有つたり無かつたりするのは儋耳(海南島の西側に置かれた郡)や朱崖(海南島の北側に置かれた郡)と同じである。倭の地は温暖であつて、夏はもちろん冬も菜が生えており、それを食べている。皆裸足である。家屋の中は部屋が分かれており、父母・兄弟が就寝したり休息したりするときは場所を別々にしている。朱や丹などの赤色顔料を身体に塗りつけることは中国において白粉を塗るようなものである。飲食には竹や木製の高杯を使い、手づかみで食している。人が死ぬと、棺はあるが、(棺を安置収納するための) 槨はない。土を高く盛り上げて高塚を築く。死んだときから、棺をその家に十日余り留める。その際、肉は食わず、喪主は大泣きし、その他の人たちは集まって歌を歌い、舞を舞い、酒を飲む。葬り終わると、一家が挙つて水の中に入って洗い濯ぎ清め、(中国の) 練沐のようである。行来渡海して中国に赴くときには、いつも一人だけ頭髮に櫛を入れず、シラミも捕らず、衣服も垢で汚れたままにして、肉も食わず、婦人を近づけず、喪に服している人のようにさせておく。この人を持衰と言っている。もしも行く者たちが事をうまく運べたら、その一行の人たちは、自分たちが持っている奴隷や財物を報酬として(持衰に) 与えるが、もしも疾病が起きたり、暴風などの被害に遭つたりすれば、持衰を殺そうとする。それはその持衰が不謹慎だったからそうなったのだと考える。倭の地では、真珠や青玉を産出する。山

からは丹(赤色顔料)が採れる。木には樺・杼・欒樟・榑・榿・投(被か)・榿・烏号・楓香がある。竹には篠・籐・桃支がある。生姜・橘・山椒・茗荷があるのだが、それらが良い味であることを知らない。獼猴(獼猴の誤記か)・黒羽の雉がいる。倭人の習俗では、行事を挙行したり、(遠隔地を)行き来するに際して決定的な発言をして実行に移そうとするときには、(鹿の)骨を焼いて吉凶を占う。最初に占おうとする事を告げる。その占う時の言葉は中国の令龜法のように、火で焼かれて出来た(鹿の)骨の罅や裂け目の状態を見て、(そこに表れた神の意思である)兆しを占う。(人々が)会同する時、立ち振る舞いに、父子や男女の間で(特別な)差別はない。人々は生まれつき酒が好きである。敬意を払うべき有力な相手に出会うと、ただ手を打つだけである。それは(中国人のする)跪拜に相当する。人々は長生きで、或者は百歳、或者は八、九十歳である。倭人の習俗では、有力者ならば、皆四、五人の妻がいる。一般の者でも二、三人の妻を持つ者がいる。成人の女性は慎ましく、嫉妬もしない。強盗や窃盗もなく、係争も少ない。人が法を犯した時には、罪が軽ければ、罪を犯した者とともに妻子を没収(して奴婢と)する。罪が重ければ、罪を犯した者の属する三族(父母・兄弟・妻のほか、父の族、母の族、妻の族)全てを殺してしまう。(身分や地位の)尊卑にはそれぞれ序列があって、(その秩序は)相互に服従すべきものとして(納得)されている。税物を取り、労役に従う(制度がある)。物資を貯蔵する倉庫がある。国々に市場があり、有るものと無いものとを交換している。(市場は、不正や紛争がないよう)大倭(国々にある市の交易状態を監督する役人)に監督させている。

*

*

*

女王国より北側の地には、特に一大率(伊都国に置かれた外交使節を檢察する役所)を設置して、諸国を監察させている。諸国は一大率を怖れ憚っている。いつも伊都国に駐在していて、中国の刺史(州の長官)のように見える。各国の王が使者を遣わして魏の京都(洛陽)や帯方郡や朝鮮半島の韓の国に詣でる時や、帯方郡から倭国に使者を遣わす時には、皆、港に入ってくるところで、文書や贈物などを調査し、女王のところへ送るものには不足や手抜かりのないようにする。下戸(一般人)が大人(有力者)と道路ですれ違う時には、一般人は後ずさりをして草むらの中に入る。(有力者が)話す言葉を(一般人が)聞く場合には、蹲ったり、跪いたりして聞く。両手は地につけて、恭敬の念を表す。返答をするときは「ヲフ」という。承諾するというようなものである。倭の国では、元来、男子を王としていた。そのような時代が七、八十年続いた後、倭の国は乱れ、互いに攻撃し合うことが何年も続いた。そこで、国々は、協力して、一人の女性を王とした。名を卑弥呼という。妖術が得意で、多くの人々を幻惑し(導いた)。年齢は已にいていたが、夫はいなかった。弟がいて、国家統治の補佐をしている。女王となってから今日まで、女王に会った者はほとんどいない。千人の奴隷女性を身の周りに侍らせている。たった一人男子がおり、飲食の席に侍り、(外部との)連絡を取り持ち、(女王の)居所に出入りしている。宮室、高殿、城柵などが厳重に設置されており、常に人がいて、兵士が守衛をしている。

女王国の東側の海を渡って千里余り行くと、また国がある。皆、倭人の種族である。又侏儒国があり、その南の人は身長が三、四尺(およそ72~96cm)である。女王国から四千里余り離れたところにある。又裸国・黒齒国があり、(侏儒国の)東南方向に船に乗って一年ほど航行すると着くはずである。倭の地のことについて人に問い合わせたところによると、海中の洲の上、島の上に住み、孤島もあれば列島もある。全体を巡り回れば五千里余りである。

*

*

*

景初二年六月(実際は景初三年六月であろうと推測されている。景初二年六月には帯方郡はまだ遼東公の公孫淵の領土であり、その八月に魏によって滅ぼされる)、倭の女王(卑弥呼)は、大夫の難升米らを帯方郡に遣わし、魏の天子のもとに赴いて直に朝貢することを求めた。帯方郡の太守劉夏は役人を派遣して、倭人の一行を(天子がおおす首都)洛陽に到着させた。その年の十二月に、魏の明帝は詔書で倭の女王(卑弥呼)に返事をした。「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方郡の太守劉夏は使者を遣わしてお前の国の大夫難升米と副史都市牛利を送り届け、お前が献上した男の奴隷四人、女の奴隷六人、種々の色に染め上げた織物二匹二丈(24m)を奉じて到着した。お前のいる処は(中国より)はるかに遠いが、使者を遣わして朝貢してきた。これはお前の忠誠心の表れである。余はお前をいとおしく思う。今、お前を親魏倭王に任命し、紫の組紐を付けた金印を与える。包装し封印して帯方郡の太守に託してお前に授与する。お前は倭人たちを手なずけて、余に従順となるように努めよ。お前が寄こした使者の難升米と都市牛利は、遠い道程を苦勞してやって来た。(それに報いるために)今、難升米を率善中郎将に任命し、都市牛利を率善校尉に任命し、各人に青い組紐の付いた銀印を与え、余が直に会って労い、(倭の地に)帰還させる。今、深紅地に龍の交わる図柄の錦を五匹、深紅地に穀粒状の縮みのある毛織物十張、茜染めの布地五匹、濃紺染めの布地五匹を、お前が献上した貢納品に対する返礼とする。又、特別にお前に、紺地に区切り模様を三匹、斑点状の細かな花模様の毛織物を五張、(染めていない)白絹を五匹、金を八両、五尺の刀を二振り、銅鏡百枚、真朱と赤色顔料の鉛丹を各五十斤与える。全て包装し封印して難升米と都市牛利に持って帰らす。(彼らが)帰り着いたら、受け取りなさい。全て国中の人に見せて、国家(魏の天子)がお前をいとおしく思うからこそお前の好む品を丁重にも賜与するのだということを知らしめなさい。」と。

正始元年(紀元240年)、帯方郡太守の弓遵は(部下の)建忠校尉の梯儻らを遣わして、(魏の明帝の)詔書と授与された印綬とを奉じて、倭国に到着した。倭王に授けて、同時に詔書を渡し、(前年に明帝から下賜された)金、布、錦、毛織物、刀、鏡や装飾された色々な品々を下げ渡した。倭王は、使者に託して(魏の帝あてに)上表し、詔と恩賜の品々に対する感謝の辞を上申した。正始四年、倭王はまた、使者として大夫の伊声耆・掖邪狗ら八人を遣わし、奴隷、倭の錦、深紅と青の染糸で織った絹織物、真綿の衣、白絹の織物、赤木の肥の短弓と矢等を献上した。掖邪狗らは率善中郎将の組紐付の職印を一律に授かった。正始六年、(齊王芳が)詔を出して、倭の難升米に(軍旗の)黄色い旗を与え、帯方郡を通じて授けた。正始八年、帯方郡太守の王頎が、(帯方)郡の役所に赴任した。倭の女王卑弥呼と狗奴国の男王卑弥弓呼はもとより不和であった。倭は、載斯、烏越らを遣わして帯方郡に赴かせ、相攻撃している状態を説明した。(そこで王頎は国境警備の官職にいた)塞曹掾史の張政らを(倭に)遣わし、(倭からの説明に基づいて作成した)詔書と(軍旗の)黄色い旗を持って行かせ、それを難升米に授け、檄文(人員の徴集などに用いる木簡に記した触れ文)を作って(卑弥呼に)告諭した。

卑弥呼は死んでしまい、大規模で直径百歩(およそ 146m)余の墳墓が造られた。一緒に奴隷百人余りが葬られた。あらためて男王を立てた

が、国中は服従しない。再び互いに殺戮を繰り返して、その時だけで千人余りが殺された。そこでまた卑弥呼の一族の耆与(台与という説もある)という十三歳の少女を立てて王とすると、国中はようやく安定した。張政らは、檄文で耆与に(統治を安定させ魏に益するよう)諭した。耆与は、倭の大夫の率善中郎将の掖邪狗ら二十人を遣わして、張政らを帯方郡に送って帰還させた。ついでに魏の都の洛陽の官庁に行き、男女の奴隸三十人を献上して、孔開きの白珠五千個、青の大勾玉二個、珍しい文様の錦二十匹を貢納した。

※書き下し文と現代語訳は、主に『現代語訳 魏志倭人伝』松尾光著 (2014年発行 株式会社KADOKAWA)を参考或いは転載しました。

《《 参考図書 》》

- 『中学社会 歴史』(平成24年発行 教育出版)
- 『改訂版 詳説日本史研究』佐藤信・五味文彦・高埜利彦・鳥海靖編(平成20年発行 山川出版社)
- 『史料による 日本史』笠原一男・野呂肖生編著(三訂版 2007年発行 山川出版社)
- 『もういちど読む 山川日本史』五味文彦・鳥海靖編(2009年発行 山川出版社)
- 『アナウンサーが読む 山川詳説日本史』笹山晴生・佐藤信・五味文彦・高埜利彦編(2013年発行 山川出版社)
- 『Story 日本の歴史 古代・中世・近世史編』日本史教育研究会編(2001年発行 山川出版社)
- 『農耕社会の成立 シリーズ日本古代史①』石川日出志著(2010年発行 岩波新書)
- 『現代語訳 魏志倭人伝』松尾光著(2014年発行 株式会社 KADOKAWA)
- 『新訂 魏志倭人伝・後漢書東夷伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳(1985年新訂版発行 岩波文庫)
- 『中学総合的研究 社会』(改訂版 平成21年発行 旺文社)
- 『中学社会 自由自在』(改訂第2刷版 平成25年発行 受験研究社)
- 『中学歴史の発展的学習』藤井譲治編著(2007年発行 文英堂)
- 『徹底演習テキスト 中学歴史』(2013年度用 受験研究社)
- 『シリウス21 歴史Ⅰ』(育伸社)
- 『中学実力練成テキスト 歴史』(文理)
- 『新中学問題集 歴史Ⅰ』(教育開発出版株式会社)